

令和6年度 ちよだ生物多様性大賞 受賞者の活動内容

入賞 目指せ！セミにもヒトにも優しい千代田区(白井 孝さん)

活動目的 セミが健やかに羽化するために、人間ができる取り組みを探ること。

活動場所 千代田区(四谷外濠公園、東郷公園など)、ほか 23 区も含む

活動時期 2024 年7月～9月

規 模 2名

活動内容 羽化に失敗したセミの抜け殻や、幼虫が土から出て羽化するまでの実際(成功例・失敗例いずれも)を観察することで、セミの育成過程が健やかであるための条件を探る。またその条件の実現のために、人間が取り組める環境活動を検討する。

●活動の様子

【抜け殻の観察】

羽化に成功したセミの抜け殻について、その周囲の環境を観察した(132 匹)。羽化に失敗した抜け殻については、それを分解し、腹弁や産卵管の有無からオス・メスを判定することで、羽化しやすい条件を調査した。

【「土から出て羽化するまで」の観察】

東郷公園にて、幼虫が土から出て羽化するまでの一連の流れを観察した。羽化に失敗した例では、人工物の木に登っては滑って落ちる、子どもの遊具に潰されそうになる、といった様子が観察された。

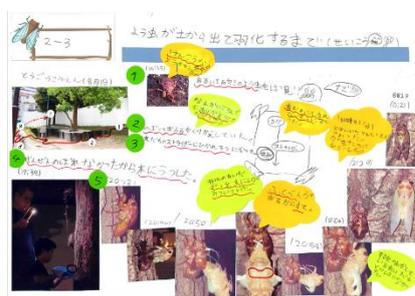
【考察・まとめ】

- ・セミの幼虫が、人工物に何度もトライして落ちる様子はもどかしかった。セミの生息が明らかな地区においては、なるべく自然の植物のみが存在するような環境計画を立てることが望まれる。
- ・仮説を立案する際は、ChatGPT を併用した。論文や過去の研究などの一次情報とあわせて、ChatGPT を適切に使用し、研究内容を深める一助にしたい。

●評価点

- ・小学2年生の活動としては非常によくできている。
- ・「羽化に失敗したセミ」という着眼点が独創的である。
- ・仮説・検証型の研究で、ChatGPT の活用などでも手順を踏んで進められている。

添付写真
(抜粋)



幼虫が羽化するまでの様子(成功例)



観察の様子

令和6年度 ちよだ生物多様性大賞 受賞者の活動内容

入賞 屋上 生物探検隊(千代田区立 お茶の水小学校)

活動目的 新しい校舎の屋上園で自然発生した生き物を調べること。

活動場所 千代田区立お茶の水小学校 屋上

活動時期 2024年10月～11月

規模 参加人数 3～6年生児童のべ70名。

活動内容 令和6年4月から使用を始めた新校舎の屋上園・ビオトープに自然発生した生き物を、3～6年生の有志児童が11月の中休みに採取したり、観察したりして、「千代田区の生物図鑑」として校内掲示にまとめた。

●活動の様子

【見つけた生きもの】

校舎使用開始から半年が経った夏～秋口ごろ、チョウやトンボが飛来したり、小さな虫の鳴き声が聞こえたりすることに児童が気づき、それをきっかけに調査を計画した。

ビオトープからはマツモムシ、アメンボ、ゲンゴロウ、イトトンボのヤゴが見つかった。土の部分からはコオロギの仲間やアリが見つかり、児童からは「どうやって屋上まで来たのだろう。」と疑問の声が挙がった。ハウセンカの花にはミツバチの、葉にはセスジスズメの幼虫の姿が見られ、都心の街並みの中でも生き物は食草を見つけ出し、たくましく生きていこうとしている姿が見られた。

【まとめ・今後について】

- ・屋上で採取した生き物は理科室前に並べ、児童は双眼実体顕微鏡でからだのつくりを調べたり、鳴いたり動いたりする様子を観察したりした。気付いた特徴からインターネット検索に適した言葉を考え、学習用タブレットを使ってより詳しく調べようとする姿も見られた。
- ・学習成果物は「千代田区の生物図鑑」と名付け、理科室前に掲示した。来年度以降は各季節に活動の機会を設けたり、学校隣の錦華公園まで活動範囲を広げたりして、継続して活動していく計画である。

●評価点

- ・教職員と児童が一体となってモニタリングを行っている良い試みである。
- ・ビオトープの完成当初から調査を開始しているため、ビオトープ内における生態系の変化を知ることができる。

添付写真
(抜粋)



理科室前掲示(千代田区の生物図鑑)



屋上ビオトープでの観察の様子

令和6年度 ちよだ生物多様性大賞 受賞者の活動内容

入賞 外ぼり公園で昆虫たんさく(石田 晴基さん)

活動目的 外ぼり公園にいる昆虫を観察し、ネイチャーポジティブについて考える。

活動場所 外ぼり公園

活動時期 2023年4月～

規 模 2名

活動内容 外ぼり公園をたんさくすると、いろいろな昆虫が見つかります。たまにめずらしい昆虫を見つけることができます。ヒメトラハナムグリの幼虫もそのひとつで、桜の朽ち木の中にいることを発見しました。また、たんさく経験を通して、ネイチャーポジティブへ向けて、今からみんなで外ぼり公園でできることを考えました。

●活動の様子

【作文の内容(要約)】

外ぼり公園のあそび場に桜の木のみきが落ちており、虫たちのエサ場になっているのを発見した。そこで、木の一部と中にいた幼虫を一匹持ち帰り、観察することにした。成虫になるまで観察した結果、その昆虫はヒメトラハナムグリであることが分かった。

次に外ぼり公園を訪れると、桜の木のみきはなくなっており、恐らく子どもたちの邪魔にならないよう、清掃員の方が片付けてくださったのだろうが、虫たちの住む場所や食べ物を残して置ける場所を残して置ける場所がもっとあればいいのになと思った。

そんな中、観察のために訪れた光が丘公園では、「朽木積み」や「たいひ場」といった虫たちの住む場所や食べ物を残しておく取り組みを行っていてびっくりした。さらに、こうした取り組みを知ってもらうための説明看板も設置しており、みんなに知ってもらうためには大切なことだと思った。人間にとっては公園内の落ち葉や木の枝やみきは単なるゴミかもしれないが、他の生き物にとっては住み家や食べ物になる。光が丘公園のような取り組みが広がれば、みんなで生物多様性のことを考えていくきっかけになると思う。

●評価点

- ・従来、公園は人間の利用を中心とした場所と位置付けられがちだが、生物多様性保全という視点をもった調査により、他区の先進的な取り組みと千代田区とを比較調査して提言している。
- ・作文という形態は初めてだが、自分にあった表現方法を選択できている。

添付写真
(抜粋)



朽木積み



外ぼり公園で見つけて成虫になった

ヒメトラハナムグリ

令和6年度 ちよだ生物多様性大賞 受賞者の活動内容

入賞 北の丸公園のトンボ類分布調査(山崎 柊星さん)

活動目的 東京都心部の限られた自然環境に生息するトンボの保全のためのモニタリング

活動場所 北の丸公園(メインの調査地)・日比谷公園

活動時期 2021年4月～

規 模 個人

活動概要 2021年から2024年にかけて、北の丸公園と日比谷公園でトンボの分布調査を行った。これまでも2019年から2020年にかけて調査を行っており、その活動を継続したものである。今回の調査では、ヤンマ科5種、オニヤンマ科1種、トンボ科10種、サナエトンボ科2種、イトトンボ科6種、モノサシトンボ科1種、ヤマトンボ科1種の合計26種類のトンボが観察された。

●活動の様子

北の丸公園の水辺(清水門・中池)と日比谷公園の心字池で、トンボの分布調査を行った。調査方法としては、捕虫網を用いてトンボ類を採集し、スマホまたは一眼レフカメラで撮影を行った。

【新たに確認できたトンボについて】

・コサナエ

2021年に日比谷公園と北の丸公園でそれぞれ1個体ずつ確認することができた。これは、コロナ禍で園内の来客者が減ったことによるものと考えられる。

・アオヤンマ

皇居から飛来してきた個体だと思われる。中池の抽水植物の増加に伴って産卵場所となる環境が増えたため、十分に生息が可能な状況であり、今後定着する可能性がある。

【今後について】

今後は、温暖化により関東まで北上している台湾ウチワヤンマの調査を行いたいと考えている。東京都心部の限られた自然環境に生息するトンボを保全し、その種の多様性を守るために、今後も調査を続けていくつもりである。在来種の保全をするにあたって、今後も池や抽水植物の適切な管理や人為的な採集圧、外来種の対策などが必要であると考えている。

●評価点

- ・継続的に地道なモニタリング活動を行っており、生物多様性の現状把握に寄与する内容である。
- ・しっかりとしたデータ把握がされている。

添付写真
(抜粋)



日比谷公園で採取したコサナエ(♂)



北の丸公園で採取したアオヤンマ(♀)